小中一貫教育国語部会

研究員
山下　景子　　箕面市立止々呂美小学校
酒井　知佐子　箕面市立西南小学校
西川　ひとみ　箕面市立止々呂美中学校

Ⅰ．はじめに

箕面市では、平成２０年度（2008 年度）に市内全域で小中一貫教育の実施を予定している。

止々呂美小・中学校では、平成１６・１７年度大阪府「小中一貫教育推進事業」の指定を受け、他校に先駆けて先行実施している。

本研究会は止々呂美小・中学校での研究をもとに、箕面市における９年間を見通したカリキュラムづくりをすることが目的である。

Ⅱ．研究テーマ

「箕面市における小中一貫教育」～９年間を見通したカリキュラムづくり～

Ⅲ．研究方法

大阪教育大学の住田勝助教授を招いて継続的に研究を続けている止々呂美小・中学校、箕面市教育研究会中学校国語部会と連携をとりながら研究を進める。

Ⅳ．研究活動

１．４月２０日（水）

：研究員顔合わせ、昨年度の流れ（Ｈ１６年度止々呂美小中国語部会）について説明

・第４木曜日実施（講師・・住田先生　大阪教育大学助教授）

・論理的思考力を意識した国語力の育成に小中連携して取り組む

２．５月１６日（月）

：Ｈ１７年度止々呂美小中国語部会について

・　第４木曜日実施（講師・・住田先生　大阪教育大学助教授）

・　文学教材の系統的学習について

：箕面市教育センター小中一貫教育国語研究員の位置づけについて

・箕面市における小中一貫教育カリキュラムの研究を推進する

～止々呂美小中学校における小中一貫教育カリキュラムを参考に～

３．６月２日（木）拡大部会（止々呂美小秋月教頭出席）

：大阪教育大学住田先生より止々呂美小中Ｈ１７年度国語部会について講話

・９年間の教科書文学教材における３つの系統性について

＜小１～小４＞文学を読むための基本的な「道具」を手に入れる時期
具体・教師主導型

＜小５～中１＞「道具」を使いながら主体的に読み進めていく時期
具体から抽象へ・子ども主導型

＜中２～中３＞「道具」を自分のものにしたうえで「自立」した読みを主体的に完成する時期
抽象・子ども主導型

4. ８月２５日（木）

：箕面市立第三中学校倉竹先生が豊能地区小・中学校教育課程研究協議会で発表された資料「国語の授業で何を伝えるか」**（※資料１）**をもとに中学校の到達点を見通した指導について交流

・中学校卒業までに国語科で付けるべき力が明らかとなった。

・小中連携を考えるとき、９年間を見通した子どもの育ち（指導のねらい・つけたい力）を共有することが大切。

・まずは、小中の教師が一堂に会して交流し、お互いを知り合うことが大切。そこからがスタート。

・中学校の教師は小学校でどんな教材がどのように指導されているか、反対に小学校の教師は中学校でどんな教材がどのように指導されているかを知り、自分の指導に生かしていくことが大切。

・教材研究の大切さ。

５．９月９日（金）（住田先生、緒方指導主事参加）

＜今後課題となること＞

・小学校と中学校をつなぐ手だてを探る

人と人をつなぐ

教材と教材をつなぐ（主語・述語の学習、小学校では述語から教えた方がよい）

つなぐにあたり課題となることは何かを探っていく

・研究会で話し合われたことをどのように広めていくか

６．１０月１４日（金）（箕面市教育研究会中学校国語部会に参加）

：「国語の学びの力をどう育てていくか」－小中連携の中で－

講師：池田市教育委員会人権教育課　　山際　博指導主事

①小学校と中学校をつなぐには

※中学校の教師は、小学校の文化をまず知るべき（言い換えたら小学校の教師は中学校の文化を知ることは必要）

②小学校の文化

：学級王国

：一人の教師がすべての教科を教える

：字がきれい

：こどもを大きな声でどならない

：国語は好きな人が多い

③小学校に学ぶこと

：教材の工夫

：授業の中で、子ども同士をつなぐ工夫

◎中学校の教師は、小学校の時どんな授業を受けてきたのかをまず知ること

◎小学校の教師は、どんな力をつけてきたのか、中学校にしっかり説明することしかし、小学校は学級王国。担任によって教え方が違う。
小学校の教師は学校カリキュラム・学年カリキュラムという意識を持つ必要がある。細河小学校では５・６年生で、中間・期末テストを実施した。

７．１１月１５日（火）
：止小中の２年間（３年間）の取り組みの報告資料について
・２００３年度の取り組み・・小中でつながりのある「聞く力・話す力」「書く力」の育成に向けて
・２００４年度の取り組み・・論理的読みの力の系統性
論理的読みの力の系統性と論理的表現力の関係
・２００５年度の取り組み・・文学教材にみられる３つの系統性
（題材・作品の構成・視点の移り変わり）
◎カリキュラムづくりの到達点　「カリキュラムづくりは授業改革である」

８．１月１２日（木）
：１月２４日（火）止々呂美小中学校における授業改革研修⑪に向けて
Ａ分科会　研究授業　１３：４０～１４：２５or３０
小学校５年生　「注文の多い料理店」　柴田正次郎先生
中学校１年生　「トロッコ」　西川ひとみ先生

研究協議　１４：４５～１６：３０ 講師－住田勝先生
※止々呂美小中学校の取り組みとあわせて研究員の取り組みについて西川教諭より報告

９．１月２４日（火）
：授業改革研修⑪Ａ分科会
【Ａ分科会（国語）】　講師：住田　勝（大阪教育大学助教授）
①これまでの研究の経過
・まずは、小学校の教師と中学校の教師が交流し、どんな教材をどのように指導しているかを知り合い、お互いの授業を改革していくことが大切。
・中学校国語の到達点を小学校で知り、９年間を見通した指導をしていくことが大切。
②講師の住田先生より
◇「幼・小・中の一貫、連続カリキュラム構築のための視座」**（※資料２）**
●幼稚園・保育所と小学校の間の断絶：小学校一年生は【ゼロ地点】ではない
・従来の小学校の教育は、子どもたちが保育所・幼稚園でどんな文学的体験をしているかを前提として進めることがなかった。保・幼と小学校の間で情報・問題意識を共有することが必要。
・小学校１年生は、文学的な体験はゼロではない。保育所・幼稚園で子どもたちは、た

とえば『１１ぴきのねこ』などの文学作品をごっこ遊びなど体を使って集団的に読み味わっている。

・幼児期の文学的体験をどのように小学校の教材に接続させていくか。『おむすびころりん』は七五調のリズムを持ち歌うように読める作品である。また、『おおきなかぶ』は劇化をとおして作品を読み味わうことに適している。どちらも、幼児期で培われてきた集団性・音楽性・身体性をつかって読み味わうことができる作品といえる。

・小学校１年生の入門期には、幼児期に培ってきた力をつかって読み味わうことができ文学作品が教材化されている。

・２年生の教材『スイミー』は、小学校で初めての本格的文学教材である。スイミーという登場人物に「同化」することによって作品世界に参加することが可能となる。
小学校２年生以降では、幼児期的な体験から、作品に描き込まれた特定の人物になって、その人物から見える世界を作品の構造・しかけに沿って見ていくことを体験していかなければならない。“「住む」から「なる」への境目となっている”ことが小学校入門期の発達課題の一つである。

・２年生最後の読書教材『黄色いバケツ』は、同化をくぐって、異化（「見る」）へ繋がる教材である。

●小中一貫の文学の読みの系統モデル

・中学校１年の教材『竜』『空中ブランコ乗りのキキ』は、小学校で学習してきたことの復習教材として位置づけられる。

・『トロッコ』は、初めての小説である。物語と小説には段差がある。抽象度の高い作品であるため子どもにとっては難解である。中学校の文学教材は時間構造が複雑化する。

●説明的文章教材の系統モデル

・５・６年生は急に難解な説明文となる。

・中学校１年生では小学校で学習した「説明文」や「初歩的な論説」の復習ができる教材配列になっている。

・小学校６年生で難しくなり、中学校１年生の入門期で再び簡単な教材になっているという教科書の教材配列を受け止めながら、小中一貫校としてどのように工夫していくかが課題である。

・文学教材の“しかけ”や説明文教材の“筆者の考え”は、抽象度の高いものであり、高学年で初めて学習するというのはしんどい。それまでに“しかけ”“筆者の考え”に注目した読みをしているかどうか、低学年からの積み重ねが大切である。

③交流

・系統性の研究が大切だと感じた。

・教科書の配列は配慮されている。カリキュラムがきちんと組まれている。小中の段差がうまれてくるのはなぜか。きちんと指導していれば小中一貫のカリキュラムは必要

ないということなのか。

・今まで９年間を通して教材を見る機会がなかった。小学校の中だけでも６年間を見通す機会がない。教材を見通すという機会をまず持つことが大事である。

・知ることで、指導が変わってきた。

・止々呂美小・中学校で研究したことが少しでも他の小中学校に広がればと思う。

・国語だけでなく算数でも同じことがいえる。小中合同でする教材研究の楽しさを実感した。

・リテラシーという言葉は、教えられなくてもできることが生涯にわたってでき続けるという状態を表す概念である。

主体的な読みとは、「文学を読む方法」「読む楽しさの意味」がわかり、自分で大事だと思ったときに身につけたリテラシーを駆使して読むことである。中学校３年生までにその力をつけて社会に送り出したい。

Ｖ．まとめ

１年間の研究を振り返り、研究員の中から出された感想を以下にまとめた。

- 従来の小学校・中学校での授業の良さを生かしながら、互いの良さを取り入れていく方向で授業改善に取り組むべきである
- 互いを知るためには、授業を見合うことが有効な手段である。
- 研究は、まずは子どもの実態からスタートし、その学校の人的資源等を活かした特色あるものにするべきである。方法や内容が子どもの実態に即しているのか、確かめながら進めていかなければならない。そのためには、授業実践を通して検証していくことが大切である。
- 教材研究をして明らかになったことを共有し、さらに授業改善につなげていくためには、９年間を通して子どもたちにつけたい力を、目に見える形に整理する必要がある。

また、大阪教育大学助教授の住田勝先生からは今後の研究について次のような提言をいただいた。

【今後の研究課題について：住田勝先生より】

中期（小学校５年生～中学校１年生）のくくりの中で、一貫性を持った教育課程を考えていくに当たり、そこには児童期と思春期という子どもたちの上に現れる発達段階の大きな節目が横たわっている。その節目をまたいでいく中期はそれ故、またぎ方として丁寧な設計をする必要があると考えられる。

具体的にいうと、児童期的な読み物（文学や説明文）を読む力をいったん点検・復習する単元と、中等教育的な教材性を持った作品とのスムーズな出会いを組織する単元をカリキュラムの中に取り入れていくということである。

子どものこころと体が大きく変動する節目は、子どもたちの国語学力の変動の節目でも

あり、それ故そこを一貫性を持ってスムーズにつないでいくことに意義がある。

「これまでの学力」をきちんとチェックし、つまずきがあればそれを補う。その上で「これからの学力」の形成のための、すこしこれまでとは異なった取り組みへと導入していく。小学校１年生が幼児期と児童期の端境期であるとすると、中学校１年生もまた、児童期と思春期の端境期であり、その意味で「二度目の入門期」と捉えられる。

（※資料１）

平成１７年度（2005年度）　豊能地区小・中学校教育課程研究協議会

２００５．８．２９（月）

国語の授業で何を伝えるか

箕面市立第三中学校　　倉竹　千佳子

【全体の概要】

Ⅰ　はじめに　（１）はるばる来つるものかな

（２）自分自身が力をつけるのに役立ったもの

（３）学校って何だろう

（４）中学校の国語

Ⅱ　「中学校 国語」の場で何を伝えるか

（１）その教材で何を伝えるか　例　現代文（説明的文章　文学的文章）

韻文　　古典　　作文

（２）国語の「授業」をどう考えているか

（３）表記すること

（４）「文」の読みとり方

（５）辞書の引き方をマスターする

Ⅲ　終わりに（お勧めしたい本）

Ⅰ はじめに

（１）はるばる来つるものかな・・試行錯誤の繰り返し

○戸惑い・・何を教えてよいのかわからない

○斎藤喜博（武田常夫）、大村はま

朝あけて 船より鳴れる 太笛の こだまは長し なみよろふ山　（茂吉）

×　木を見て森を見ず

（２）自分自身が力をつけるのに役立ったもの

○先輩の先生方、同僚の先生方、教科会議

○出会った生徒たち

○実力テスト、定期テストなどテスト問題の作成と採点
◎府教育センターでの研修・・日中の研修。生徒の気持ちがよくわかる。
○市　〃　　研修
○その他、さまざまな研修・・市教研、教育課程協議会、関西俳人協会（句会）等

（３）学校って何だろう
日本の社会で生きていくための基盤をつくるところ
（詳しくは、後掲の、この書名の本をお読みいただくとよくわかります）

（４）中学校の国語
○義務教育（後期）・・社会性・日本文化の刷り込み
○社会人として生きていくための「言語」の教育をするところ
●言語の四つの機能――認識・思考・想像・伝達
（Ｈ１１年度　府教委　新教育課程説明会）
●「四つの力」を鍛え、伸ばす場
読む力・・正確に　読む（一字一字押さえる気持ちで）
早く　　読む（スピード）
味わって読む（ ──線を引いて）
書く力・・「読む力」と表裏をなす
読み手との「対話」、書く内容の把握、論理的展開
（奈良教育大学　棚橋　尚子先生　のお話より　）
聞く力・・集中力、持続力、まとめる力、聞きながら考える力
話す力・・「場」・「聞き手」を読みながら、内容、構成、テンポを
短時間に整える
（大村はま　『日本の教師に伝えたいこと』より）

○入試（高校、大学）も一つの到達点
● 分かっていることを得点化する力をつける（資料１「国語答案の書き方」）
●「塾」に行っていない生徒が損をしないようにしたい。
● 古典、漢文の基礎の徹底　（高校に進学後の生徒の感想）
● 表現技法・・「高校生としては常識として持っていてほしい」(高校の先生談)

○教師と生徒の「力」の差
●中学生は１０年以上、「日本語」を使って生活してきている。
●小学校で「国語」の学習をしてきている。
●教師と生徒の「力」の差は、他教科に比べて小さい？

・現代文・・「読めばわかる」　興味を失う
・『走れメロス』の生徒の感想
●国語の教師は、国語が好き、得意だった（そうでない生徒もいる）

○「□□先生から○○ということを教わった」と残る授業をしたい。
国語が得意な生徒の勘やセンスに頼る授業をしたくない。
（大村はま他　『教えることの復権』に感銘を受けました。遠く、及びませんが）

Ⅱ　「中学校　国語」の場で何を伝えるか

（1）その教材で何を伝えるか

○その教材を教えて満足していないか？
○国語としての目標をはなさない
（大村　はま　『日本の教師に伝えたいこと』）
読めばわかる・・生徒は興味を失う
◎「授業には、発見・驚きがなければならない」

現代文　説明的（論理的）文章　**例**　（資料２　長文の読み取り方）
○題名読み　（→ 作文の指導・・「テーマ文は一つ」
○段落の構成（序論、本論、結論）　段落の役割り（問題提起、具体例　など）
○段落のはじめのことば　キーワード、キーセンテンス（骨になる文）
○具体と抽象の読み分け　事実と意見の読み分け　比較と対照
○指示語とその答え方
※資料３　『ことばが輝くとき』２枚

例　韻文　詩　短歌　俳句
○５Ｗ１Ｈ　登場人物、あらすじ、事件（大、小）、　テーマ
○段落構成（起承転結）　○伏線　○情景描写→心情（象徴）　○表現技法
○比較・対照　○視点→ なりきり作文
＊『そこに僕はいた』・・「気になった一文」を抜き出して短冊に書いて黒板に貼る
その後、その理由を各自発表する。（資料４　２枚）
（箕面五中　渡部　洋子先生の実践報告を参考にして）

例　韻文　詩　短歌　俳句
○日本語の豊かさを伝える　○暗唱　○表現技法
○少ないことばから、想像でふくらませて、情景・心情を読みとる
○そのアプローチの方法

●季節はいつ？　一日のうちいつ？　　作者はどこにいて、何を見ている？

●感じられる色彩は？

＊全員起立させて、一人、一言必ず発言する。→ 着席

その詩に関連することなら、何でもＯＫ。　（感想、わからないところ、ＯＫ）

内容が同じであっても、表現が違えばＯＫ。（よく聞いていないとダメ）

例　古　典

○古典に親しませる　　○昔の人の考え方・感じ方を知る

○日本語の豊かさを伝える　　○日本語のリズムを味わう（暗唱）　　○表現技法

○資料５「古文読解のために」　資料６「平家物語　敦盛の最期（敬語）」

例　作　文　（担任として文章を書かせることのほうが多いが）

○テーマ文は一つ　　○段落構成　　○「読み手」を意識させる

○話しことばと書きことば ○原稿用紙の使い方 ○ 文字・ことばの正しさと美しさ

○「自分らしさ」の出る作文（切り口の新鮮さ）　　○良い作品を紹介する

（２） 国語の「授業」をどう考えているか

○確かな知識が土台になければ、深い理解はできないと考えている。

◎感覚ではなく、何らかの形あるものとして伝えたい。(たとえ「How to」であっても)

◎授業には発見・驚きがなければならない。

◎自分一人で読んだ時には分からなかったことがわかる授業、たくさんの人数で読んだからこそ深まる授業を目指したい。

「教えるとは問うことである」（武田常夫『真の授業者を目指して』）

講義型・・積極的受け身　　（教材や場面に応じて）

劇場型・・生徒一人ひとりの活動・発表　　両方とも必要

○「『先生の指示通りにすると自分は伸びる』とわかると、生徒の意欲は向上する」

（大阪教育大学　名誉教授　中西　一弘　）

○まずは、参加させることが大切・・それだけでも力はつく（「つかみ」の大切さ）

○授業の流れが単調にならないように

聞く時間　　考える時間　　作業の時間　　発表の時間

（３）表記すること

○ノートのとり方・・情報処理能力の一つと考える（プリントの処理も含めて）

●早く・正しく・美しく・・一目で文字をつかむ量を多くする練習

（前掲　中西　一弘　）

●余白の美（項目ごとのまとまり）、書き出しの高さ、　工夫（メモ）

●ノート他流試合・・他人のノートを見る機会。生徒は喜ぶ。（資料７、資料８）

（大阪教育大学　附属高校(天王寺) 教諭　中西　一彦　）

●文法のノートにページ数をうち、目次を作らせたこともある。

○漢字の力をつける

●新出漢字は丁寧に教える（部首、画数を意識させる）

●練習・・大きく書かせて、丁寧にチェックする（一生のうちで、最後の機会だ）

●漢字テスト・・練習をチェックした後で。「書き」のみを口頭で出題。

○かな遣い・・文法と関連づけて

動詞の送りがなは活用語尾からが原則。ダ行のヂ、ヅは連濁の時に。　など

（４）「文」の読みとり方ーー重文や複文の読解の練習

資料９　　齋藤　孝　『日本語ドリル』　宝島社

（５）辞書の引き方をマスターする（特に漢和辞典）

資料 10　自分を見つめる（Ｈ８年度　府センター 中学校国語研修Ａまとめ より）

Ⅲ　終わりに

教育実習に行った時、教師になりたてのころ、「何を教えればいいのだろう」と、本当に途方にくれたことを今でもありありと覚えている。それからもずっとこの問いは私の頭から離れたことはない。ここ数年、「この教材は、〇〇を教えるのに適しているのではないか」と、やっと思えるようになってきた。これまでに、実に多くの先生方からお教えいただいたおかげだと感謝している。今度は、この発表が、どなたかのヒントになれば幸いである。（多くの方が、こんなことあたりまえと一笑に付されるかもしれないが……）

なお、すでに自家薬籠中のものとなり、どなたからお教えいただいたか不確かなものもあり、これは断っておりません。失礼の段、お許しください。

以下に、参考にしている本、お勧めしたい本を掲げます。

「学校って何だろう」　　苅谷　剛彦　　講談社（1998 年）

学校の図書館でふと目にした本ですが、ひきつけられました。学校の果たす役割りが中学生にもよく分かるように説明されています。なるほどと、学校現場にいながらも気付かなかったことを指摘され、頭の中が整理されました。不登校ぎみの生徒も読んでいました。どんな感想を持ったのか知りたかったですが、聞けませんでした。

「教えることの復権」　　大村　はま、苅谷　剛彦・夏子　ちくま新書

苅谷　夏子さんは、大村　はま先生の教え子です。中学生時代のことをしっかり覚えておられて、その立ち場からの発言が新鮮でした。授業時間が余った時「ごほうびと言ってお話をしてくださるの。それがとてもうれしかった。ごほうびが、お話なんですよすごいでしょ。」という発言に、新任のころ、ベテランの先生が新学期になさるお話がとてもおもしろいと目を輝かせて話していた生徒がいたことを思い出しました。自分の力のなさを自覚し、早く年をとりたいと思ったことも。大村　はま先生はやはりすばらしいです。「民主々義の担い手をつくろう」と、「話す力」「聞く力」をつける授業をなさっています。頭が下がります。

「これで古典がよくわかる」　　橋本　治　　ちくま文庫

「和漢混交文は現代の文章のルーツ」と、鎌倉時代の「徒然草」にスポットを当てて説明。漢字の伝来・漢文から現代の文章への文体の変遷がとても上手に説明されておりもっと若い時にこの本に出会いたかったと残念に思った本です。

「日本語ドリル」　　齋藤　孝　　宝島社

英語のように、意識的にトレーニングすべきところはあるなあと思えます。ドリル問題を解いてみてください。生徒がつまづくところがよくわかります。

「中学の『現代文』を１週間で攻略する本」　　向山　洋一編　　ＰＨＰ研究所

「中学の『古典』　を　　〃　　」　　〃　　〃

この２冊、「How to　本」を侮ってはいけないと強く思いました。この手の本としては、今まで出会った本の中で、秀逸です。

本日の発表とは無関係ですが、ぜひお読みいただきたい本です。

「バッテリー（ Ⅰ ～Ⅵ ）」　　あさのあつこ　　角川文庫他

Ⅳ巻～はまだ文庫化されていませんが、ここからがもっとおもしろい！　野球に打ち込む少年が、百人一首の歌を会話の中にポンポンはさむのです。思春期の人間の汚い心がいっぱい描かれているところもいいと思いました。

「スラムダンクな友情論」　　齋藤　孝　　文春文庫

題名の浅薄さに惑わされてはなりません。深い内容です。中３生ぐらいの内容です。

（※資料２）

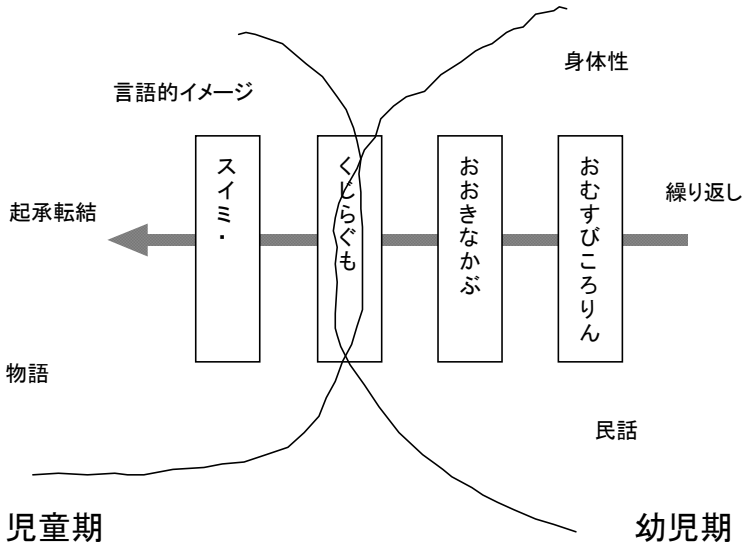
授業改革研修⑪（兼：小中一貫教育研修）資料

2006 年 1 月 24 日（火）　於　箕面市立止々呂美小・中学校

大阪教育大学　住田勝

幼・小・中の一貫、連携カリキュラム構築のための視座

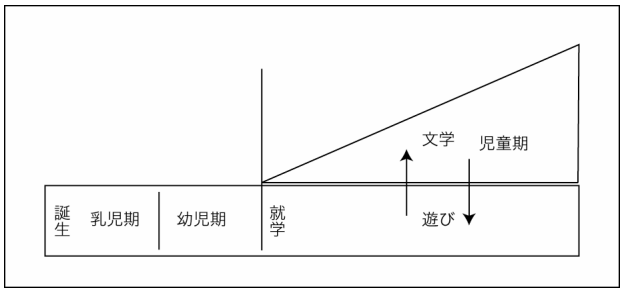
● 幼稚園／保育所と小学校の間の断絶：小学校一年生は【ゼロ地点】ではない



→『11 ぴきのねこ』ごっこあそびの中で集団での読み味わい、読み深まりが身体的、集団的に生成される（幼児期的読解の姿）。【住む】

→『スイミー』 書き言葉によって綴られたテクスト。その作品に描き込まれた「スイミー」という登場人物になることで作品世界への参加が可能になる作品。【なる】

→『黄色いバケツ』（光村 2 年上読書単元）同化をくぐった異化へ【見る】



● **小中一貫の文学の読みの系統モデル**

○前期（小１ー小４）入門期＋文学のさまざまな構造やしかけに乗りながら豊かな文学的体験を繰り返す。（触れる）

○中期（小5ー中１）そうした構造やしかけを意識的自覚的に使ってみることでより豊かな文学の読みの成功体験を積み重ねる。（慣れる）

○後期（中2ー中３）自覚化された文学の構造やしかけを己の文学的認識として血肉化し、それを駆使して自立的な読書主体として立上がる。（使う）

● **説明的文章教材の系統モデル**

✧　1年ー4年：1年生のはじめに入門期を置くものの、序論本論結論の基本的組み立てをもった明快な説明文教材。

✧　5年・6年：急に論理的展開にバリエーションや破格があらわれたり、テーマが難解になったり、わけても、筆者のものの見方考え方が前面に押し出される教材へとシフト。論説化。特に6年生では、抽象性が高まり、思想性や哲学性が強調される。

✧　中1：1ー4年でやってきたいわゆる【説明文】の復習。
筆者の考えが前面に出てくる5年6年の【初歩的な論説】の復習。

✧　中2ー：さまざまなタイプの【論説文】の学習。高等学校論説評論へ。

平成１７年度　豊能地区小・中学校教育課程研究協議会　中学校　国語

２００５．８．２９（月）

国語の授業で何を伝えるか

箕面市立第三中学校　　倉竹　千佳子

資　料　綴　り

資料１　（Ｐ２）「国語の答案の書き方」　Ｂ５　１枚

資料２　（Ｐ３）「長文の読み取り方」（クジラの飲み水）Ｂ４　１枚

資料３　（〃）『ことばが輝くとき』　Ｂ４　２枚

資料４　（〃）『そこに僕はいた』　Ｂ４　２枚

資料５　（Ｐ４）「古文読解のために」　Ｂ４　２枚

資料６　（〃）『平家物語　敦盛の最後』　Ｂ４　１枚

資料７　（〃）「ノート他流試合」　Ｂ５　１枚

資料８　（〃）　Ａノート　抜粋　Ｂ４　１枚

資料９　（Ｐ５）『日本語　ドリル』　練習問題　Ｂ４　１枚

資料１０（〃）　漢和辞典を引く　⇒　自分の名前についての作文を書く　Ｂ５　１枚　Ｂ４　２枚

国語の答案の書き方

Ａ　解答用紙の解答らんだけで意味がわかるように書くこと。したがって、次のことなどに気をつけよう。

①　気持ちや様子を説明するときは、主語が必要。
　特に登場人物が二人以上のときは、だれの動作なのか、だれの言葉なのかをはっきりさせること。

②　解答らんに指示語を使ってはいけない。
　答える内容の中に指示語があれば、必ずおきかえること。ただし、抜き出しなさいという場合は、指示語のままでよろしい。

Ｂ　指示語が指している部分を抜き出す場合
　抜き出した部分がその指示語のあるところにぴったりあてはまるように書くこと。なお、文中の単語が漢字なら漢字のままで書く。（×　ひらがな　）

Ｃ　答え方のパターンをしっかり身につけよう。

◎「なぜ」「どうして」と聞かれたら　⇒　「〜から　」
◎「どのように」　〃　⇒　「〜というように」「〜ように」
○「何のため」　〃　⇒　「〜のため」
○「どう思ったからですか」　〃　⇒　「〜と思ったから」
○「どういう気持ち」　〃　⇒　「〜という気持ち」
○「だれの目」　〃　⇒　「〜の目」
○「何　」　〃　⇒　「　名詞　」

Ｄ　「抜き出しなさい」という指示があったときは、必要な部分だけ、１字１句まちがいなく、そっくりそのまま抜き出す。

①　句点（。）や読点（、）もそのまま（あれば書く。なければつけない）

②　漢字は漢字のまま、ひらがなはひらがなのまま使う。

③　必要な部分の文末を抜かしてはいけない。

④　指示語があってもそのままで、そのまま使う。

Ｅ　「○字以内」とか「○字前後（程度）」というように字数制限があるときは、次のように気をつける。

１、句読点をふくむのか、ふくまないのか、問題をよく読んでその指示に従う。特に指示がなければ、句読点も１字として数えるのが原則である。

２、「二十字で　答えなさい」　〃　⇒　二十字ぴったりになるように。
　「二十字程度で　〃　」　〃　⇒　十七〜二十三字くらいの字数で。二字ぶんの誤差はかまわない。
　「二十字以内で　〃　」　〃　⇒　二十字を超えてはいけない。十七〜二十字までの間におさまる

Ｆ　その他

１、答えは１文で書くこと。（だらだらと書かず、必要なことをまとめる。）

②　文脈がおかしくないか考えること（主語と述語の関係など）

３、数字は原則として漢数字を使うこと。（○一人　二個　×１人　２個）

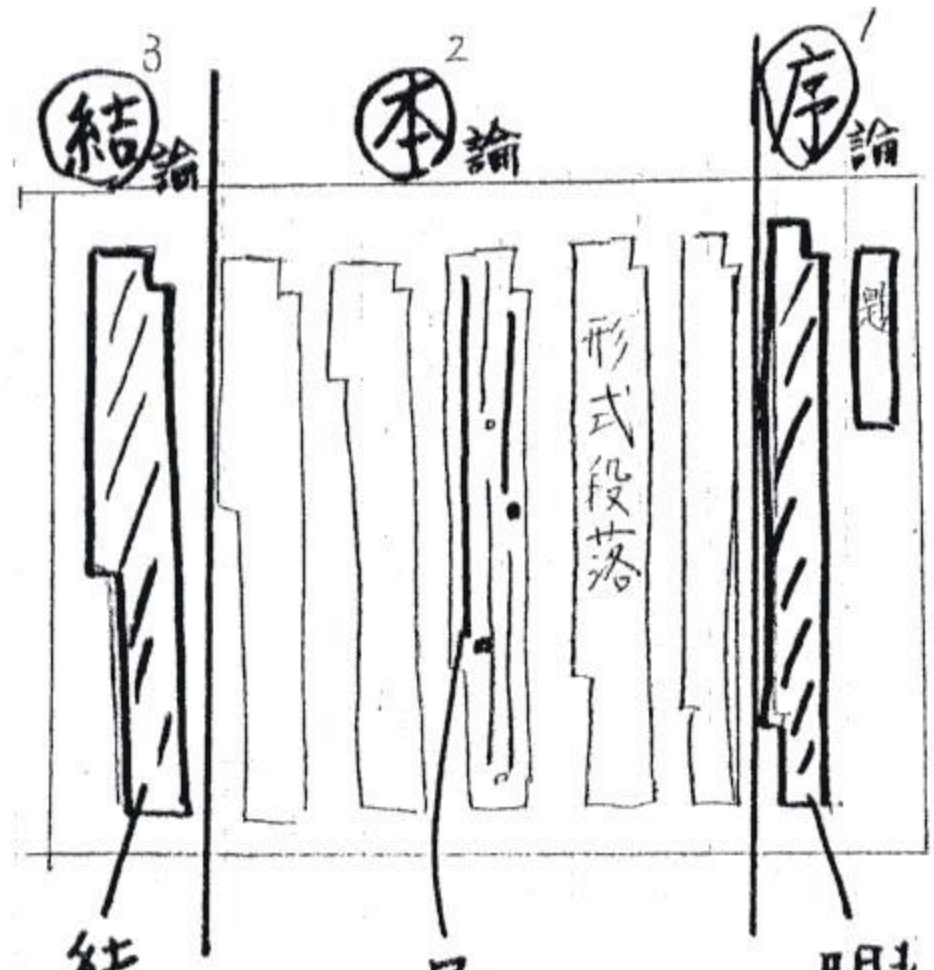
４、誤字、脱字に注意すること。

資料１

長文の読みとり方（クジラの飲み水）

☆長文
説明文（説明的文章）、論説文・随筆など
ポイント
筆者の意見・考え（結論）を読みとる

☆読みとり方
(1) 段落の構成 ― 大きく 三段落構成
意味段落



問題提起（だいていさ）
どんなことを話題として考えようとしているか

骨になる文

結論
筆者の意見・考え

(2) 題名読み
クジラの飲み水は、どうなっているか？
〃 は 〃 をどのようにして得ているか？

(3) キーワード
何度も使われても大切なことば
クジラ、飲み水

(4) 骨になる文章（キー・センテンス）
その段落で一番大切な文

(5) 段落相互の関係
→ 段落のはじめのことば

(6) 接続詞（せつぞくし）のことば
だから　A↓B
しかし　A↔B
そして　A＋（プラス）B
つまり　A＝B

(7) 指示語（P33）
・前に出てきたことばや内容を指し示すはたらきをすることば
これ　それ　あれ
この　どれ
このように

・指示語の答え方の原則
① 指示語より前の部分にあることが多い
② 答えをもとの文にあてはめて、文脈がおかしくなりないか確かめること
③ 答え方のパターンを守る
どんなこと → ～こと
このため → ～のため

ことばが輝くとき

キーワード ⇒ A キーセンテンス ① P.3〜P.4
線のところ
B キーセンテンス（段落のはじめと終わり） ② P.5〜P.6 ③ P.7

光る・いきいき
良さを発揮する

俳句 俳句 ↓ 資93

一 問題提起

問題提起

短歌をつくっていると言うと、よく質問されることがある。

「歌になることばと、ならないことばって、どう違うんですか？」

「美しい日本語って、どういうことばだと思いますか？」

もともと、歌に向いていることばとか、美しいことばとかがあるのではない、とわたしは思う。辞書に載っているときには、みんな同じ顔をしていることばたち。そのことばたちを、どう使っていくか。その心のこめ方によって、ことばは美しくもなるし、醜くもなる。

「美しい」「美しくない」は、ことばそのものの責任ではなく、それを使う人間の側の問題ではないだろうか。

筆者の意見（答え）

同じ内容

二 具体例（ことばを使う人間の側の問題であることの）

具体例その1

例えば、こんな短歌をつくったことがある。

万智ちゃんを先生と呼ぶ子らがいて神奈川県立橋本高校

教師として初めて教壇に立ったころの歌だ。友人や家族からは「万智ちゃん」と呼ばれているような自分を、「先生」として見つめている生徒たち。そのてれくささや、身のひきしまる思いなどをこめた一首だった。下の句の「神奈川県立橋本高校」というのは、実際にわたしが勤めていた高校の名前で、校門にも書かれているし、学校の封筒にも印刷されているし、来客用のスリッパにも記されている。そんな身近な、ありふれた固有名詞である。が、それがそのまま短歌の下の句になるおもしろさ。そのおもしろさが、この歌の一つのねらいでもあったのだが、そのことによって、この「神奈川県立橋本高校」ということばが、とても喜んでいるように感じられた。短歌の下の句になって、誇らしげにしている様子を見ていると、いっそういとしく思われてくる。

①どんなありふれたことばでも、舞台を与えられて、スポットライトを浴び

抽象 → 具体

壇 教壇 3　封 封筒 7　醜 醜い 7

スポットライト 14
舞台などの一部分だけを目立たせるための照明。

意ありふれた 8
意いとしい 13

具体例その2

びれば、いきいきと輝き始めるのだ。

また、さまざまなことばとことばの組み合わせを工夫することによって、お互いがひきたつこともある。わたしたちは、ことばを発明することはできないけれど（空はソラと決まっているし、海はウミと呼ばなくてはならない。）、ことばの組み合わせは発明することができる。たくさんのことばを知って、その中から組み合わせを考えて、デートさせてみる楽しさ。すてきなことばのカップルが誕生したとき、その組み合わせは「詩」と呼ばれることになる。

同じような内容

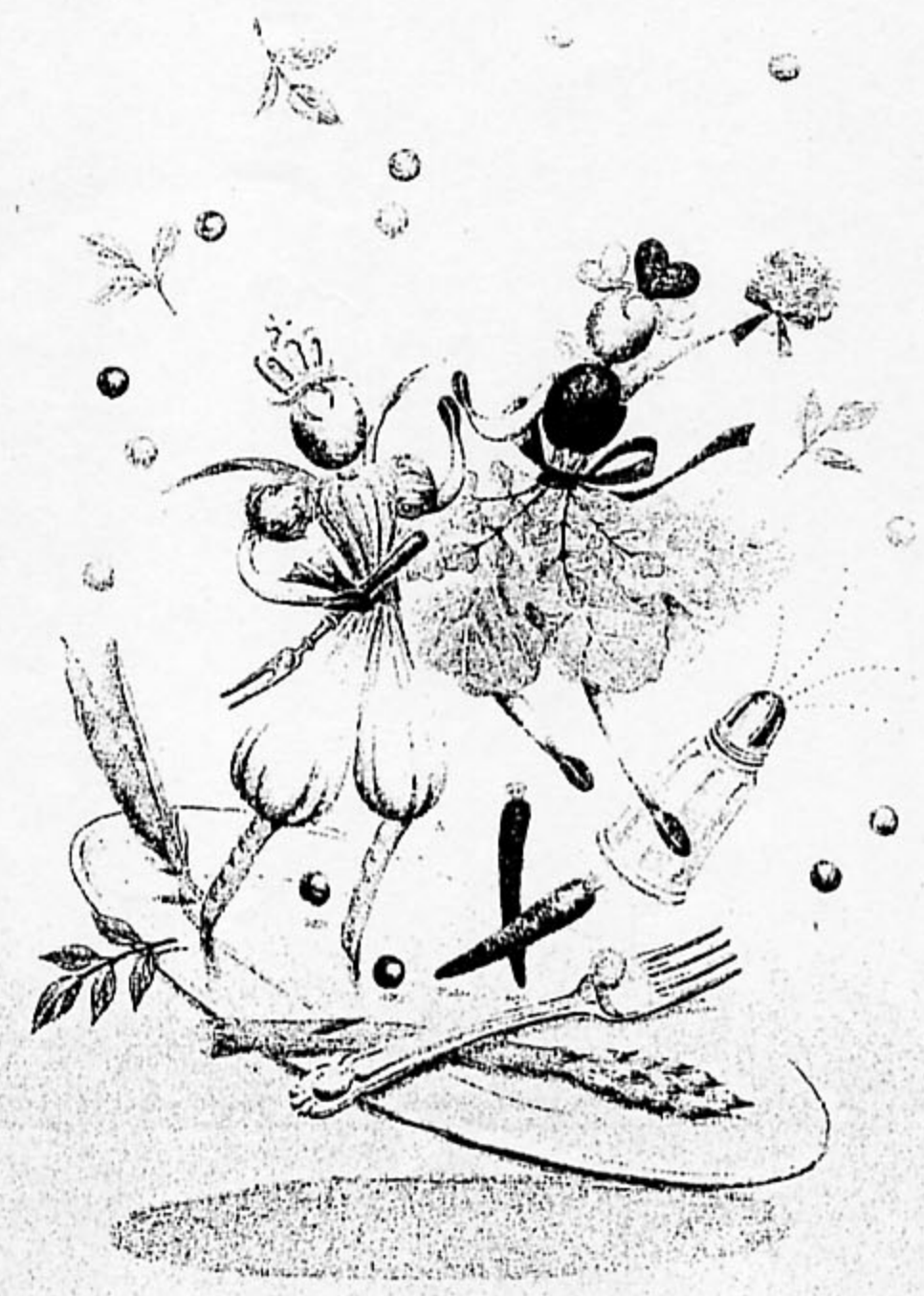
抽象

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

恋をしているときは、どんな小さなできごとでも、自分にとっては忘れられないものとなる。そんなときめきを表現したくて、わたしはことばを探した。サラダということばも、記念日ということばも、とても身近なものだ。けれど、この二つのことばを組み合わせることによって、自分なりの恋の気持ちを表すことができたように思う。②サラダと記念日が出会うこ

具体

意ときめく 11



資料 3 — 1

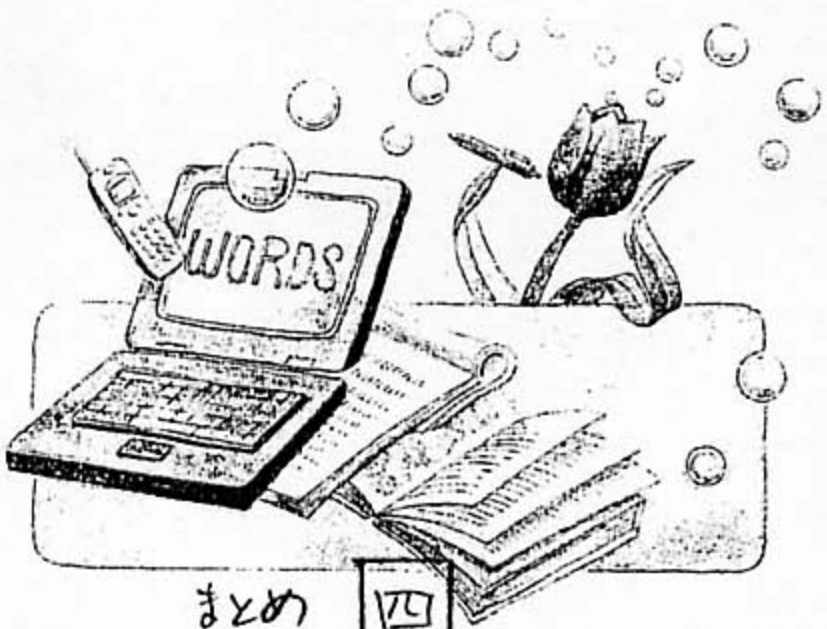
とによって、それまでにはなかった輝きが、この二つのことばに生まれた瞬間だった。

三 展開

短歌をつくるということは、このように、自分の心をことばで表現することだが、短歌に限らず、だれかに心を伝えるためには、ことばという道具がなくてはならない。「以心伝心」や「あうんの呼吸」というコミュニケーションもあるが、ことばがなくても心が通じるほどの関係になるまでには、やはりことばが必要となるだろう。

例えばだれかを好きになって、その思いを伝えたいと思ったとき、人はことばを探し始める。直接話す場合も、電話をかける場合も、あるいは手紙や電子メールを書く場合も、自分の心を形にしてくれるのはことばである。ただ「好き」と百回言っても、千回書いても、相手は戸惑ってしまうだけだろう。とても難しいことではあるけれど、気持ちを整理して、相手のどんなところが好きなのか、自分は今どう思っているのか、などをことばにしなくては、熱い思いは伝わらない。

そんなとき、たくさんのことばをもっていれば、自分の思いにぴったりの表現をすることができる。③ 大切に選ばれたことばたちは、きらきら輝き始め、相手の心にきちんと届くことだろう。もちろん、それで失恋してしまうこともあるだろうけれど、うまく伝えられずに失恋してしまうよりは、ずっと納得できるはずだ。



四 まとめ

そんなふうにことばを使えるようになるには、どうしたらいいのだろう。恋の告白というような一大事のときだけ、急にがんばっても、やはり無理である。ふだんわたしたちは、初対面の人を含め、家族や友人やあらゆる人たちと、ことばを使ってコミュニケーションをしている。

筆者の意見

電子メール10　コンピュータを通して文字やデータなどの情報を、手紙をやりとりするようにお互いに送ったり受け取ったりすることができるシステム。また、それによってやりとりされたもの。Eメールともいう。

以心伝心5　あうんの呼吸5

その一つ一つの場面で、ことばを大切に使っていくことが、なによりのトレーニングだ。ことばを使うたびに、よく選び、よく考え、そして心をこめること。その積み重ねが、心の筋肉を鍛えてくれる。肉体と同じで、日ごろから使っていれば、ここぞというときに力を発揮できるだろうし、怠けていれば、どんどん筋肉は衰えてしまう。

豊かな心には、豊かなことばが詰まっている。そして豊かなことばがあれば、豊かな恋をすることができるだろう。愛する人からの、なによりのプレゼントは、ことばの花束なのだから。

〈この教科書のための書きおろし。〉

筆者の意見

鍛1　鍛える3

怠1　怠ける4

ここで学習する漢字

醜2（シュウ みにくい）　醜態3　壇（ダン）　壇上3　封（フウ ホウ）　封印4　鍛（タン きたえる）　鍛錬5　怠（タイ おこたる なまける）　怠慢5

学習のために

◎ことばの美しさ、豊かさについて考えを深める。
◎ことばのはたらきを具体的な事例に即してとらえ、筆者の考えを読み取る。

1　引用されている二つの短歌について、感想を話し合おう。

2　筆者はどのようなことを述べるために二つの短歌を引用したのか、まとめよう。

3　この文章の筆者はどのような人だろうか。ことばに対する考え方や人柄などについて、想像してみよう。

4　「ことばが輝くとき」とはどんなときだろうか。そういう場面がなかったか自分自身の経験を振り返り、話し合おう。

表現の工夫　ことばのコラム1

「ことばが輝くとき」の文章には、言いたいことをより効果的に伝えるために、表現のうえでさまざまな工夫がされています。例えば、次のような表現です。

●「どんなありふれたことばでも、……いきいきと輝き始めるのだ。」(3・14)　〈擬人法〉

●「それがそのまま短歌の下の句になるおもしろさ。」(3・9)　〈体言止め〉

●「そして豊かなことばがあれば、豊かな恋をすることができるだろう。愛する人からの、なによりのプレゼントは、ことばの花束なのだから。」(8・6)　〈倒置〉

このような表現の工夫を、自分たちの表現にも生かしていきましょう。→資20

〈事件Ⅳ〉 綾辻の出来事を調べ	「ありがとうございます」
東京高校時代の	。「あーねさんって、じゃ、あなたは自分の見た夢だったんだ」 まし出した手のひらを自分の目の前にかざす。 「あーねさん」 「電車にはねられたんだ」
〈事件Ⅲ〉 田辺ゆかりの事件	。泥の深みにはまって悪戦苦闘している「あーねさん」 に手を差し出す。 ……
五日後	。「あーねさん」というお嬢様は、 なぜ、いっしょに来ないの？
〈事件Ⅱ〉 石橋ひろ・服部事件	。「あーねさん」を待ちながら、 。北方の目がかがやかれていた。 始めていたのだ。 ……
	。「あーねさん」と綾辻の会話を聞いていた。
〈事件Ⅰ〉 三ヶ谷町での悲劇的事件	。「あーねさん」の見ていた神経を使う。 。謝る。「ゆずりたくない」 。手を差し出す。 ……
小学校三年生のころ	。「あーねさん」の綾辻の「ない」 。周りの大人の感覚の区別
陣内 麗の捜索	「解決」の気持ち・行動

「ゆずりたくない人」（井上 俊）　青山 麗

※この話を時間の流れで、ページの上から下へ、右から左へと読んでください。あなたの心の中にある、ゆずりたくない人は？

現在	麗
「あーねさん」を振り返る	「あーねさん！」
同時に、あなたは、あなたにしかできないことがあるのに。 なぜ、ゆずらないの？	。「あーねさん」の見ていた。 。謝る。「ゆずりたくない」 。手を差し出す。 ……
人一倍意地っ張り	。「あーねさん」と綾辻の麗 。気が重い。憂鬱。 。「あーねさんとゆずりたくない」 思いこむ。
「後」は、自己を気持ちで生きる。	。「あーねさん」を待ちながら、 。北方の目がかがやかれていた。 始めていたのだ。 ……
「あーねさん」は、 なぜ、ゆずらないの？	。「あーねさん」の綾辻の会話を聞いていた。 。彼の綾辻の金属の音が気になる。
「あーねさん」の手を握ったのは、 「後」の手に、彼はハンドルを 。「あーねさん」の綾辻の麗 。「あーねさん」の見ていた。 。「あーねさん」の見ていた。 。「あーねさん」の見ていた。

「そこに僕はいた」

一年　　組　　番　氏名

①「そこに僕はいた」を読んで、君が一番気になった部分を抜き出しなさい。
※「気になった部分」とは、一番大事だと思った部分でもいいし、一番心を動かされた部分でもいいし、この小説の主題にかかわるポイントかもしれないというような部分でもいい。（あとで模造紙に四十字以内程度で書いて、発表してもらいます。）

②なぜ君が①のところを抜き出したのかが分かるように説明して下さい。（これをもとにあとで説明してもらいます。）

③他の人が発表していた中で、君も重要だと思った部分を一カ所書きなさい。

④なぜ③の部分が重要だと思ったのですか。わかりやすく説明しなさい。

授業の展開

- ○本読み（CD）
- ○プリント　１枚目をする
- ○「気になった一文」を模造紙（短冊）に書く。
- ○短冊を時間の流れに沿って黒板に貼る。
- ○順番に各自、発表する。（理由も含めて）

↓

読みとり

- ○プリント２枚目をする。
- ○発表する。（まとめ）
- ○教科書ワークをする。

古文（文語文）読解のために（一年生用）

☆五十音図（清音）

行 ↓

行＼段	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	あ	い	う	え	お
カ行	か	き	く	け	こ
サ行	さ	し	す	せ	そ
タ行	た	ち	つ	て	と
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ行	ま	み	む	め	も
ヤ行	や	い	ゆ	え	よ
ラ行	ら	り	る	れ	ろ
ワ行	わ	（ゐ）	う	（ゑ）	を

段 ←

※① 現代仮名遣いでは、ワ行の「ゐ」「ゑ」はまったく用いられず、「を」は「～を」という形でだけ（助詞としてだけ）用いられる。

※② 撥音の「ん」をワ行の次に書くこともある。

☆歴史的仮名遣い（国語便覧 P20）

平安時代の中ごろまで、発音と仮名づかいは一致していたが、以後、発音は時代とともに変化し、文字との対応関係がくずれた

読み方（☆印は教科書に出てくるもの）

①「ゐ・ゑ・を」⇒「い・え・お」

☆ゐたり⇒いたり　こゑ⇒こえ（声）　をとこ⇒おとこ（男）

②「ぢ・づ」⇒「じ・ず」

☆よろづ⇒よろず（万）　みづ⇒みず（水）

③語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」⇒「わ・い・う・え・お」

あはれ⇒あわれ　☆使ひけり⇒使いけり　☆言ふ⇒言う

☆惑へど⇒惑えど　☆いとほしく⇒いとおしく

④「む」⇒「ん」

☆もと光る竹なむ⇒もと光る竹なん

⑤「くわ・ぐわ」⇒「か・が」

くわし⇒かし（菓子）　ぐわんじつ⇒がんじつ（元日）

⑥「ア段＋う（ふ）」⇒「オ段＋う」

やうす⇒ようす（様子）　まうす⇒もうす（申す）

⑦「エ段＋う（ふ）」⇒「イ段＋よ＋う」

けふ⇒きょう（今日）　てふ⇒ちょう（蝶）

⑧「イ段＋う（ふ）」⇒「イ段＋ゆ＋う」

☆うつくしうて⇒うつくしゅうて　うれしう⇒うれしゅう

☆古文の読み取り方のガイド

古典は古文で書かれています。古典を読むためには、古文に読み慣れることが必要です。古文（文語文）は現代文（口語文）と違う書き方がされています。現代文と違う点を以下にあげます。

一、歴史的仮名遣い

「あはれ」「あわれ」　「使ひけり」「使いけり」　「いふもの」「いうもの」　「ばうず」「ぼうず」（坊主）

二、主語や述語が省略されていることが多い。

今は昔、竹取りの翁といふものありけり。野山にまじりて……使ひけり。（……。その竹取りの翁は、野山に分け入って、……。）

三、主語の後に「が」を補う。

竹取りの翁といふものありけり。 ⇒ 竹取りの翁というものがいた。

四、現代文では使われないことばや言い回しがある。（便覧 P23、21）

「よろづ」「おぼす」「具す」「たてまつる」「きこしめす」

五、今とは意味が違うことばがある。（便覧 P22）

「まじりて」「あやしがりて」「うつくし」「いとほし」「かなし」

《古文読解のために》（三年生用）

一　会話文の見つけ方

☆「言はく、言ふやう、のたまひける」などの次から始まる。
☆「……て」「……ば」の次から始まることが多い。
☆引用を示す「……と」「……とて」「……など」の前で終わる。

イ　かえるあまたあつまりて言ふやう「あはれ……立つことを祈らむ」とて
ロ　翁いふやう「我朝ごと夕ごとに見る……人なめり」とて、手にうち入れて
ハ　この宿のあるじにやあらん、夜中に起き出でて、「さてもいみじき雨風かな。かくて明日はかならず晴れなん」とぞいふなる。
ニ　あるじあやしうおぼえて、「その鼻より……いかなることにか」と言ひければ、取りもあへず、「このごろの氷魚は、目鼻より降り候ふなるぞ」と言ひたりれば人皆「は。」と笑ひけり。
ホ　上人いみじく感じて「あなめでたや。この獅子の立ちやう、いと珍し。」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊勝のことは御覧じとがめずや。……」と言へば、おのおのあやしみて、「まことにほかに異なりけり。都のつとに語らん」など言ふに

二　主語の見つけ方（――線部分の）

①問題文全体を読んで、そこに登場する人物と、それらの人物の関係を把握する。
（特に、問題文の最初に登場する人物と、他の人物との人間関係に注意する）
（違う単語でも、同一人物を指すことがあるので、注意する）
●ある僧、人のもとに行きけり。酒などすすめけるに、氷魚はじめて出できたりければ、あるじめづらしく思ひて……（人――あるじ、僧）
②――線部の前、あるいは後ろにある人物が主語ではないかと、まず疑う。
③主人公はだれなのか？　主語を問う問題が二つ以上あれば、少なくとも一つは、主人公であると思って、ほぼまちがいない。
④主語を答えるときは、単語でよい。（例、あるじ）
※現代文では、文節単位（例、あるじは）
⑤●……A……て、……B……
A　と　Bの主語は同じことが多い。
●……A……ば、……B……
A　と　Bの主語は違うことが多い。（一　の例　二、ホ　参照）

三　気をつけるべき単語

☆かなし
- 愛し……いとしい・かわいい。
- 悲し……悲しい
- 怪し……不思議だ・変だ・みょうだ
- 賤し……いやしい・見苦しい・みすぼらしい

☆あやし
- ☆いみじ（いみじき）……とても・すばらしい・ひどい。
- ☆ありがたし……めったにない。☆あはれなり……しみじみとした趣がある。☆をかし……趣がある。☆ゆかし……見たい・心ひかれる。☆めでたし……すばらしい
- ☆やうやう……しだいに・だんだん。☆かたし（難し）……むずかしい。
- ☆かく……こう。　☆さ……そう　☆いと……とても。☆ふみ（文）……手紙・書物。

四　歴史的かなづかい⇒現代かなづかい

①「ゐ」「ゑ」「を」⇒「い」「え」「お」
●ゐたりけるに⇒いたりけるに　●手にすゑて⇒手にすえて
●風の吹かむをりぞ⇒風の吹かむおりぞ（※ただし、助詞の「を」はそのまま）
②語中や語尾の
「は・ひ・ふ・へ・ほ」⇒「わ・い・う・え・を」
●あはれ⇒あわれ　●思ひける⇒思いける　●道（は）ふ⇒道う
●たまふ⇒たまう　●いにしへ⇒いにしえ　●いとほし⇒いとおし
●道はせたまはれ⇒道わせたまわれ
③「ぢ・づ」⇒「じ・ず」
●わづかに⇒わずかに　●ぢょうぶ⇒じょうぶ
④「……a＋ふ（う）」⇒「……o＋う」
●やうやう⇒ようよう　●まうす⇒もうす
⑤「……i＋ふ（う）」⇒「……yu＋う」
yau　you　mau　mou
●りうぐう⇒りゅうぐう　●しんにふ⇒しんにゅう　●ひうが⇒ひゅうが
ri u　ryu u　nyu u　hyu u
⑥「……e＋ふ（う）」⇒「……yo＋う」
●いてふ⇒いちょう　●けふ⇒きょう
tenu　tyo u　kenu　kyo u

五　助動詞・助詞

☆「む」（ん）――推量　明日、雨降らむ。（雨が降るだろう）　秋風吹かむをり
意志　白河の関越えんと（白河の関を越えようと）　女もしてみむとて
☆「ぬ」――打ち消し　来ぬ人を松帆の浦の（来ない人）
完了　月かたぶきぬ。（月は沈みかけていた）　夏が来ぬ（夏が来た）
☆「けり」　過去　はやくしりを結ばざりけり。（結んでいなかったわ）
腹あしき人なりけり。（怒りっぽい人であった）
真白にぞ雪は降りける。（雪は降り積もっていた）
☆「し」　過去　吾妹子が植ゑし梅の木（いとしい妻が植えた梅の木）
☆「たり」「り」　存続　簡の中光りたり。（簡の中が光っている。）
螢の多く飛びちがひたる（螢がたくさん飛び交っている様子）
大社を移してめでたく作れり。（りっぱに作ってある）
☆「ず」　打ち消し　何の用にも立たず。（何の役にも立たない）人はいさ心も知らず
乗らざりけり。（乗らなかった）何とも言はざりし返事
☆「らむ」現在推量　しづ心なく花の散るらむ（散っているのだろう）
☆「え……じ」「え……まじ」　……できないだろう。
え待たじ。え待つまじ。――待てないだろう。待てそうもない。

☆古文学習のポイント　（二年生用）

① すらすら読めること
歴史的仮名遣い（便 P18）
⇐
現代仮名遣い

② 今は使わない単語（便 P21）
いと（たいそう）。まさなし（ひきょうだ）

③ 今とは意味の違う（便 P20）
あやしがりて（不思議に思って）
うつくし（かわいらしい）
。やさし（優雅だ）

④ 主語（便 P19）
省略されることが多いので、その動作の主体をいつも考える

⑤ 助詞（便 P19）
。省略されることが多い
。主語を示すのがある
秋風が（の）吹く

⑥ 係り結びの法則（便 P18）

こそ	かも	や	なむ	ぞ
已然形	連体形		終止形	
（れ）	（る）		（り）（例）	

⑦ 敬語（プリント）

⑧ 会話
「と」

平家物語――敦盛の最期

二年（　）組（　）番　名前（　　）

☆登場人物……教科書P116から読み取れることを書きなさい。

○熊谷――名前（熊谷次郎直実）
・源氏方の武将
・身分の高い大将軍に出会って取り組みたい（手柄を立てたい）と思っていた。

○若武者――名前（平敦盛）
・平家の公達
・一の谷の戦に敗れたので、逃げようとしていた
・立派な衣装、立派な武具、立派な馬⇒大将軍

☆敬語（文法教科書P80～P81、便覧P218を参考にしなさい）

○尊敬語……相手を高めることで、相手をうやまって言う言葉。
○謙譲語……自分がへりくだることで、相手をうやまう気持ちを表す言葉。
○丁寧語……物事をていねいに言う言葉。

〈なんぢ〉（おまえ）
〈のたまふ〉（おっしゃる）（言う）
〈申す〉「殿」

直実
・～まゐらす（助けまゐらす）（「お～する」「お～いたす」「お～申し上げる」と訳す）
・～たてまつる（討ちたてまつる）
・つかまつる（つかまつり候はめ）（いたす）
〈謙譲語〉

若武者
・～たまふ（見せさせたまふ、問ひたまふ、名のらせたまふ）（「お～なさる」「お～になる」「～いらっしゃる」と訳す）
・ます（ましまし候ふ）
・おはす（おはしけり）
・～たまふ　・～させたまふ
〈尊敬語〉

〈丁寧語〉
・～です　～ます　ございます
・候ふ

ガイダンス

2001 4/11

国語の授業の大切さ

①日本語で考える
〃 理解する
〃 伝える

国語の授業を受けるに当たって

☆授業を大切に―日々の積み重ね

1、ベル着―②漢字の勉強
2、話をしっかり聴くこと（先生・友人）
復習
3、③しっかり考える
4、発表する―自分のことばで
5、しっかり書く↓頭に入る

。早く・正しく・美しく

⑥⑤忘れ物をしない（最低限教科書とノート）
⑦自④分なりのノートを作る（とにかくメモ）

☆④提出物を期限を守って出す
☆ことばに興味を持とう
☆活字に触れよう

ためになる解説

①書き始めの高さに注意。
②家で出来ない人はこの時間を使え。
③それでも分からない場合は先生に援助を求めよ。
④工夫あるのみ。
⑤便覧・ファイル・文法・ワークは前前に連絡・事
⑥平常点に響く。（かなり）

感想

ふだん、みんながあまり気づかないことも、いなかに住むと、時間の流れがゆっくりになるようで、自然のいろんなことが分かるんだなあと思った。

good

☆題名読み

春のいぶき
息吹＝生き（生き）とした気配や様子

☆ジャンル（文章の種類）

随筆＝生活の中で体験したことや考えたり感じたりしたことを自由に書いた文章

☆春なのだ！ 感嘆符
―筆者があげている春の現象や情景―

〈自然〉

あらゆるもの　新鮮で生きいきとしている　動きが表面化する
万物みなみずみずしく胎動し始める
季節

。たんぽぽの花……山じゅうに散る（咲く）
。桜前線の北上

文章を読むときのだいじなこと

最初と最後の文をしっかり読むと文全体がだいたいわかる
題名も大事

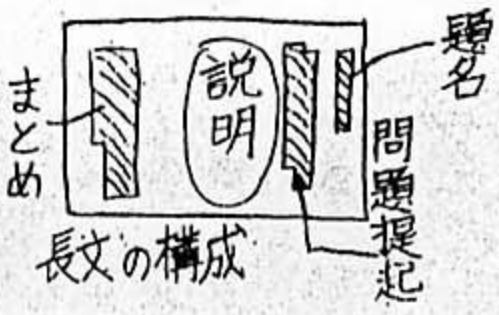
文を読むとき えんぴつで一字一字おさえるように

具体例
抽象
一般論
かっこいい文章は注目

1ページの一行目までが自然のこと

春のいぶきの学習を終えて…
桜前線の北上する様子を、花咲かじいさんの北上と書くのは、おもしろい表現だと思った。
私達も、半島に住んだら、ものの見方が変わるんだと思う。
今でも、ひまな時は、自然をゆっくり見たりするのもいいなあ、と思います。

①長文のテクニック
題名を読みとる。
②事実と意見を読みわける。



③骨になる文
KEY-SENTENCE
キー・センテンス

ノート他流試合

（　　）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

☆５人（最低２人は異性）の人と勝負しよう！（自分が勝てばO、負けX、同じ△）

	ノートの持ち主	勝負	正確さ	美しさ	工夫、努力	感想
	自分のノート	X	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
1			5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
2			5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
3			5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
4			5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
5			5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	
6	先生の評価	A	A′ B	B′ C		

2 自分を見つめる

実践内容

「自分の名前」――無着成恭『詩の授業』を参考にして

① 漢和辞典の引き方を学ぶ。
　ワークシート等を使って、引き方に慣れる。

② 自分の名前の漢字の意味を調べる。

③ 親に名前の由来について聞いてくる。（親の願い）

④ 「自分の名前」についての詩を読む。（前掲書より）

⑤ 「自分の名前」についての文章を書く。

⑥ 発表する。

興味・関心・意欲を育てる工夫
授業のアイディア集

平成8年度中学校「国語」研修Aにて

⇩

実践に対する学習者の反応

親や自分の周りの人々の、自分（の誕生）への思いを知って感動している生徒が多かった。

私が授業で心掛けていることは……　池田市立細河中学校　倉竹千佳子

・「次の時間、国語か。いややなあ。」という生徒をつくらないようにすること。
・毎日の生活にフィード・バックできる授業。

活動シート

広告のテクニックしらべ

★商品が使っているテクニックに○をつけよう。

また、特にひきつけられたテクニックには◎をつけよう。

	商　品　名										合　計	
広告のテクニック											○と◎を合わせた数	◎の数
1.　おまけや景品をつける 例:もれなく○○をプレゼント												
2.　同じ値段で量が増えた 例:20%アップ												
3. 有名人やキャラクターを使う												
4. おもしろいネーミングや調子のよい言葉 例:うまか棒												
5. おいしそうに感じる 例:写真や絵												
6. 健康によさそう 例:塩分ひかえめ　カロリー半分												
7. 新発売・新製品												
8. (発見したテクニック)												
9. (発見したテクニック)												
10. (発見したテクニック)												